
聖蘭女学院高等部

百合宮桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖蘭女学院高等部

【Zコード】

Z90171

【作者名】

百合宮桜

【あらすじ】

家柄によりて『翡翠』と『白金』の一種類の寮に分かれる聖蘭女学院高等部。ある日、平和な学院に理事長の鶴の一声で男子が性別を偽つて編入してきた。その事実を知っているのは眞面目な生徒会長真里だけ。彼女は彼の行動にハラハラし通じ。笑いあり、涙あり、恋ありの学園ファンタジー！！

第一章 放課後

第一章 放課後

ここは聖蘭女学院高等部生徒会室。

ある日の夕方、生徒会長山田真里はいつものように生徒会室で書類を整理していた。

「全く奈緒子は相変わらず来ないし、和子と穂波は知らないうちに帰っちゃうし……一人で書類整理している私が馬鹿みたいじゃない」

カタカタカタカタ……とノートパソコンの無機質なキー音と真里の独り言が生徒会室に響く。

いつか誰かが言っていた。「この世で一番損するのは生真面目過ぎる奴だ」と。

真里は今、その普遍的な事実を身を持って体験していた。春の連休でやつと一息……と思つた矢先のことだ。お陰で真里は里帰りすら、叶わぬ始末。

全く本当に副会長吉田奈緒子を始めとする役員のやる気のなさと理事長と先生方の学校運営の丸投げっぷりに感嘆の意を表さずにはいられない。

自分にはとても真似出来ないとと思う。しかし放課後真っ直ぐ此処へ来てからというもののずっと書類と格闘してたので流石に肩が凝った。少し肩をほぐすためにも休憩にしようと思い、顔を上げたら時計がすでに完全下校時刻一分前を指していた。しばらくすると高等部の校歌が流れ出した。完全下校時刻を知らせるためだ。

そつは言つてもこの学校は全寮制のミッションスクールなので校舎に隣接する『翡翠の館』に帰るだけだが。隣接する寮に帰るために下校時刻を定めるなんて馬鹿げてると思いながらも、その本当の理由を知つている真里は書類を保存し、ノートパソコンをスリープ状態にしてから通学カバンにノートパソコンを入れて渋々部屋

をあとにした。

正面玄関に行くと生活委員長の小富がいた。

「お疲れ様です、会長」小富は言った。

「お疲れ様。今から帰り? 大変ね、お互い」真里も小富に労りを言葉を返した。

小富は品行方正なお嬢様風の学生だ。家も茶道の家元で礼儀はとても厳しく育てられたという。そのためか、マナーについては人一倍うるさい。生活委員にはぴったりの学生だ。実際、彼女が委員長になってからはかなり聖蘭生のマナーが良くなつたと専らの評判だ。真里としても非常に助かっている。良い評判は多ければ多い程良いのだから。

「でも私は来月までの辛抱ですから。来月は礼節強化月間ですので」

「もうそんな時期なのね。頑張ってね」

「はい、ありがとうございます。一緒に緒しても?」

「いいわよ」

真里のその返事を合図に一人は玄関を出た。

「奈緒子さんは相変わらずですか?」小富が言った。

「ええ、ブランチナ白金だから授業に出なくて良いとはいって、あそこまで登校拒否するのもどうかと思うのよね。他の生徒達にも悪いし……もう少し役員としての自覚を持つてくれるといいのだけど」

そう真里が愚痴ると小富は苦笑した。

「まあ白金ですかね。仕方ないんですかね、やっぱり。でも他の役員の方々はどうしたんですか?」

「知らないうちに帰っちゃつた。多分声掛けてくれたんだらうけど仕事に没頭すると気がつかないのよ。悪い癖ね」

「長所は短所……ですね」

真里は苦笑いした。そんなことを話してこむつちこむつちこ小富の部屋がある階に着いた。

「それでは私はここで。」きげんよつ、真里ちゃん

「「きげんよつ、由美子ちゃん」

挨拶は「「きげんよつ」と誰であろうと名前呼びは聖蘭の伝統だ。どいであのうと淑やかに慎ましく、スカートを翻すよつな真似は万が一にもしないようゆつくり歩く。それが幼稚舎からずつと教えられる此処での常識であり、マナーだ。それを忠実に守つてきた真里は一人、自室に戻るとすぐ制服を脱ぎ、部屋着に着替えた。

「はあ～疲れた」

ドサツとベッドに倒れ込む。ここ最近はため息をついてばかりだ。吐きたくなるくらい忙しいのだから致し方ないのかも知れないが。学校は入学式から始まり卒業式で終わる。この二つの行事はどちらも春だ。つまり春は必然的に生徒会の仕事も増える。年度末の決算が終わつたと思つたら、次は新年度の予算、それが終わつたら今度は入学式、その次は……もう考えたくもない。兎に角春は忙しい。大好きな桜を愛でる時間すらない。知らないうちに葉桜になつていることもザラだ。しかも理事長を始めとする学院上層部と先生方がいい加減なせいで生徒会長＝校長という妙な方程式が成り立つてしまつているので益々自分の負担は増えるばかり。

いい年の大人がどうしてこんな子供に付き従つているのだと都合の良い時だけ子供を振りかざして考えたこともあるにはあつたが、所詮自分如きがあの理事長に勝てる訳がないと今では割り切り、逆にそれを利用するのも良いかもしないとまで考えている。我ながら随分と丸くなつたものだと感心しながら、ベッドでうつらうつらしていると急に電話が鳴つた。

「はい、山田です」

「山田君、儂じや」

「理事長！どうしたんですか、こんな時間に。急用ですか？」

時刻は午後七時半。遅いというわけではないが、外はもう闇に包まれている。女の子が……特に聖蘭生が一人で出歩くような時間ではない。

「いや～ 実は明日から転校生が編入するんじゃが……まあ転校生と言つても儂の孫なんじゃが。少々問題が有つての」

「何ですか？」

「喧嘩グセがあるのじゃ。よくよく訳を聞いてみれば一概に孫が悪いと言えるような喧嘩ではないんじゃ。筋が通つてゐるのじゃよ。手が早いのは困りものじゃが」

「はあ……？」

真里にはマイチ主旨が掴めなかつた。

「実はもう一つ問題があるのじゃ」

「何でしょ～？」

「男なんじや」

「…………はあ～？」たつぱり十秒フリーーズしてから思い切り真里は驚いた。

「どういうことですか？」存知かと思ひますが、聖蘭女学院は元々聖蘭修道院を母体とした華族の娘が質素な生活とどこへ嫁に出しても恥ずかしくない礼儀作法を身につけるために修道女シスター・ノアが設立した親元を離れ、己を律するための学校です。ここが女子校で全寮制なのは己を律するのに恋は邪魔だとシスター・ノアが判断したからです。違いますか！ それなのに男を入れる？ そんなのは言語道断です！ 私は反対ですよ！」

「そんなこと言つたつてもう決めちゃつたんじやもん。明日から白金に入るからよろしく～」

「はあ～？」

このむちゅくちゅ理事長との会話で既に三度目の「はあ」。本当に今日は厄日かと言つたくなつたが、何とかこらえた。

「でもさ～

電話口から理事長の勘にさわる呑氣な声がした。何だこの妖怪爺と言いたくなるのを必死にこらえて、「何ですか」と応えた。少し言い方に棘があつたかもしれない。

「白金に入るのは奈緒子ちゃん以来じやの～きつと喜ぶの、奈緒

子ちゃん

「そうだと良いですね。ていうか男女が一つの屋根の下でしかも二人きり……というのは問題ですか？」

「大丈夫だよ。奈緒子ちゃんだし。それに儂の孫も男といつてもニコーハーフみたいなもんじゃし」

理事長、本日一度目の爆弾投下。男の上にニコーハーフ、男の上にニコーハーフ……その事実がドップラー効果のように真里の頭の中に繰り返し響いていた。

「山田君？」

「あっ、はい。何でしようか？」

「まあ、そういうわけだからうちの孫をよろしくね～」

「あの、理事長」

「何じゃ？」

「条件を付けさせて頂いてもよろしくですか？」

「言つてみなさい」

「お孫さんを監視する意味でも生徒会に彼を入れて下さご。ちょいと書記が空席ですし。」

「ん～いいよ。困つたら、君を頼れと言つてあるし。逆にその方が君と友達でも不自然じゃないしね。じゃあ奈緒子ちゃんに連絡よろしくね。あつ、男だつて「う」とは君と儂、一人だけの秘密だから。バーアイ」

ツーツーツー……一方的に言つたことだけ言つて、理事長からの電話は切れた。そのまま中に呆れつつも真里は奈緒子に電話をかけた。

「もしもし?」

奈緒子ではない女性の声がした。おそらく彼女付きのメイドである。

う。

「『翡翠の館・寮長室』の山田真里です。奈緒子さん?」在室ですか

「はい。少々お待ち下さい」

『エリーゼのために』が保留音として電話口から流れ。待つこと二十分。ようやく保留音が切れて、奈緒子の声が聞こえてきた。

「もしもし？ 真里？」

「はあゝ遅い」

奈緒子が自分中心に世界を回していくことは中等部からの付き合いによくわかつていた。一・三時間待たされることもザラだ。だが電話でこれはないだろ?と思つ。否、思わずにはいられない。

ほつきん
どんだけ待たせたと思ってるんだ：相変わらずの唯我独尊つぶりに
気付かれないようにそっとため息を吐いて、

「だけど理事長のお孫さんだつて理事長自身が仰つていたわ。彼女に
色々白金のこと、学院のこと教えてあげてね、奈緒子」
（ラヂオ）

「教えてあげて！わかつたわね！..！」

—
へ
い
へ
い

八八

電話を切った後、タインケはくまでも真里の携帯が鳴り、メールの着信を告げた。

（アーリー語からがな）そう思って、真里は携帯を開いた

件名

添付
孫の宣真

卷之三

やつほ~。いやあ~すまん、すまん。さつき孫の「」とをあまり詳しく述べなかつたと思うての。メールした次第じや。
以下孫の詳細じや。

名前 田村優奈（本名 田村優）

性格 手が早いこと以外は良い奴じゃ。

所属 一年百合組（真里ちゃんと同じじゃ）

外見は添えつけた学生証の証明写真を見ればわかると思うが、田鼻立ちのはつきりとした非常に田立つ顔じゃ。親戚たちにはよく「宝塚の男役のようだ」と言われておる。確かに男にしては随分美人さんじゃからのお。

まあ、こんなことじやな。よろしくの。明日、入寮じゃ。このメールは少し編集して、奈緒子ちゃんに転送してもOKじゃ。

From 理事長

理事長からか……奈緒子に転送していいって書いてあるけど転送して読むかな、アイツ。読まないだろなあ～電話しよ。

「はい、もしもし？」今度は奈緒子が出た。待たされなくて済んだとホッとした。

「もしもし？ 奈緒子？」

「真里か。どうしたの？」

「理事長からメールが来た。転校生の詳細、わかつたよ

「へえ～どんな感じ？」

「名前は田村優奈。理事長が仰るには良い子で、美人だそうよ。ただの孫馬鹿かもしないけど。でもまあ、外見は孫馬鹿抜きにしてもお釣りがくるほどの美人さんよ。『宝塚の男役』って理事長は仰っていたわ。本当にその言葉がしつくつくる美人さんなのよ。写真だけメールで送つとくわね。所属は一年百合組。私達と同じクラスよ。寮での世話はあなた、学院での世話は私に一任されているわ。だから優奈さんには生徒会書記になつてもらおうと思つたの。いいわよね？」

「ドーセ、ダメつて言つても無駄だろ。同学年なんだね

「まあね。理事長が仰るには明日入寮みたいだからしつかり面倒見てあげなさいね。じゃあ、お休み

「はいはい、おやすみ～」

奈緒子は真里からの電話を切った。

「突然だよなあ～明日なんて。何でこんな半端な時期に？なあ、

木山

「そうですね。でも理事長のお孫さんなのでしじつ？何か特別な
ご事情があるのかもしませんわ」

木山は今年一十三になる若いメイドだ。奈緒子が中等部に入学する
時から彼女付きのメイドとなつた。高校三年間は彼女も聖蘭で過ご
した。所謂中流家庭と呼ばれる家の娘だが、非常に頭が良く、聖蘭
時代も秀才としてその名を轟かせていた。

「そんなもんか？」

「そんなもんですよ」

「ふーん。じゃあ、もう休もう。疲れたよ」

「そうですね」

木山に添寝されて、奈緒子はすやすやと夢の中へ旅立つて行つた。

第一章 奈緒子

翌朝。

「木山～おはよ」

「おはよう」ぞこます。奈緒子お嬢様

木山を呼んだはずなのに心えたのは執事の山内だつた。

「あれ？ 木山は？」

「木山は朝食の材料を買いに行きました」

「そつか。今日、ここに転校生が来るんだつて。何時に来るか知つてる？」

「存じております。今朝五時半頃に山田様からお電話がありました。放課後、四時頃に学校へ挨拶に来るそうです。ですから、こちらにいらっしゃるのは四時半くらいではないでしょつか？」

「四時半かあ～暇だね、それまで」

「そうですね」

「ねえ、山内。ピアノ引いてよ

「何を」希望ですか？」

「そうだなあ～バイオリンソナタ第五番『春』の第一楽章の伴奏してよ。あたしがバイオリン引くからさ」

「かしこまりました」

山内は恭しく頭を下げ、ピアノに向かつた。

一人が「春」を引いていると、木山が帰つてきた。

(あら……「春」ね。美しい朝ね。いつもは昼まで寝てる奈緒子ちゃんも今日は起きてるみたいだし。山内さんが奈緒子ちゃんの気を引いてる間に私も朝食作っちゃお) 木山は朝食を作り始めた。一人が気づかぬよつになるべく静かに。

木山が朝食をほとんど作り終わり、後は盛り付けるだけとなつた時、ピアノとバイオリンの音が止んだ。どうやら演奏が終わつたらしい。次の曲を引き始める前に一人を呼んで来ようつと思つ、木山は台所を出た。

「奈緒子ちゃん、山内さん。『ご飯ですよ～』

二人に声をかけた。

「木山さん！！帰つてらしたんですか？すみません、朝ご飯の準備、お任せしちやつて」

ギョツとしたような表情で山内が言つた。

「いいのよ。朝から素敵な演奏が聞けたし。それに山内さんが奈緒子ちゃんと一緒にいてくれたから私も安心して朝食の準備が出来たわ」

「そう言つてくれると気持ちが楽ですけど。すみません、本当に山内はすっかり恐縮してしまつていて」

山内は奈緒子が高等部に入学する時に彼女付きの執事となつた歳は二十六で木山より上だが、使用人としては木山の後輩となるわけだ。しかも吉田家の使用人の中でも一番下つ端である。本来なら何事も自分が全てやるつもりで率先してやらなければいけない身分である。なのに朝食の準備を全て先輩に任せてしまつなんて…と学生時代は運動系サークルに所属し、生まれてこの方、ずっと縦社会で生きてきた山内は一人、自己嫌悪に陥つていたところに、奈緒子が声をかけてきた。

「山つちはピアノが上手いな。引いてて気持ち良かつたぞ」

「へつ？はあ……ありがとうございます」

「良かつたですね。山内さん。奈緒子ちゃんが人を讃めるなんて滅多に無いんですよ。音楽のこととなると特に」

「そうなんですか？」

「ええ。私は奈緒子ちゃんのお世話をさせていただいて、もう五年になりますけれど初めて見ましたもの」

「へえ～」

自分のピアノなど大したことではないと思つていた山内にとつては意外だった。

「さて朝食の準備も出来たことですし、食べましょうか。冷めてしまいますわ。」

「そうですね」

「それでは皆さん、本日も食事が出来ることを神に感謝して」

「「「いただきます」」」

三人とも黙つて朝食を黙々と食べた。奈緒子は内心、今日来る転校生が楽しみで仕方がなかつた。

今まで『白金の館』に住んでいたのは自分と使用人たちだけだった。だから自分と同じ寮で暮らせる友達が来るのが嬉しいのだ。ワクワクしながら山内や木山と遊んだり、株をやつたりしているとあつという間に時間が過ぎ、夕方になつた。

第三章 挨拶

真里は生徒会室で優奈の到着を待っていた。奈緒子以外の役員も一緒にいる。

「ねえ、真里。もうすぐ来る転校生って美人かなあ？まあ、私的には可愛い系も大歓迎だけど」

「うつわ、穂波の奴、自分の毒牙にかける気満々だよ。どうする？真里」

「ここに来たら、必ず一度は受ける洗礼だと思っておきなさい、和子」

真里はにこりともせずにパソコンに手を走らせながら言った。

「はーい」

真里の機嫌が下降傾向にあるのを感じ取りながら和子は返事をした。
「穂波、妄想してにやけるのやめなよ。ただでさえ真里の機嫌が悪いんだから」

「妄想なんてしてないよ。ショミュー・ショーンしてるだけで」

「同じだよ」

「違う！」

「同じ！」

「違う！」

「違う！」

二人が言い争いをしていると怒気を含んだ声で真里が言った。

「二人とも五月蠅いわ。とつとと仕事しなさい」

「「はい……」」

自分の一声で子犬のように頭を垂れて返事をする一人を見て、心中でクスリと笑う。

幼稚舎の頃からの腐れ縁だが、こういう所は本当にそつくりで犬のようだと思う。ずっと自分の顔色を伺わせるのも可哀想なので、「もういいわ。その代わり次からはちゃんとするのよ」

と言つてやつた。

「「ほんと？ありがとう」」

二人がホッとした表情を見せ、何だか和やかな空気が流れる中、三人は各自の仕事に励んでいた。ドアをノックする音がした。

「どなた？」

真里が言つた。

「一年百合組、田村優奈です」

「お入りなさい」

「失礼します」

「そのソファへお掛けなさい、優奈さん」

「はい」

緊張気味に優奈は言つた。

「ようこそ、聖蘭女学院高等部へ。私は生徒会会長山田真里です。どうぞよろしく」

「はい、田村です。こちらこそよろしくお願ひします。山田さん」

『山田さん』優奈は真里のことをそう呼んだ。それがおかしくて穂波はクスクスと笑つてしまつた。釣られて和子も笑い出す。そんな二人の反応を見て、優奈は何か変なことを言つてしまつただろうかと青ざめ始めた。三人の様子を見て、真里は穂波と和子を咎めた。

「一人とも笑わないの。優奈さんはまだこの学院に来たばかりで伝統を知らないのだから仕方ないでしょ？」

「「めん、めん。」真里が『山田さん』なんて呼ばれているの久々だからつい……ね。生徒会会計の渡利穂波よ。よろしくね、優奈さん。あと聖蘭では誰であるかと名前呼びが伝統だから名字で呼ぶと浮いちゃうわよ。だから皆、真里のことも私のことも名字では呼ばないわ」

「そなんですか。えつと……よろしくお願ひします、穂波さん

？」

「うん、それでいいの……にしても可愛い」

ギュッと穂波が抱き付いてきた。そして頬にチュッとキスをした。

「へ！？」

優奈はたちまち赤面し、軽いパニックに陥った。

「大丈夫だよ。穂波流の挨拶だから。深い意味はないよ

「はあ……？えっと……あなたは？」

「ああ、自己紹介まだだつたね。私は生徒会会計橋元和子。よろ

しく」

和子はスッと右手を差し出した。

「はい。こちらこそよろしくお願ひします」

優奈も和子に右手を差し出し、一人はしつかり握手した。

「あの……ところで副会長さんと書記さんは？」

「副会長は白金な^{プラチナ}のよ。白金のことは知つてゐる？」

「いいえ」

「この学院は全寮制で生徒は皆、寮で暮らしてるわ。一つは『翡翠の館』。一般的に生徒の大半が住む寮よ。家賃も手頃だし。もう一つは『白金の館』。ここに副会長は住んでるわ。家賃も高いし、生徒が在学中は毎年必ず一口以上は学院に寄付しなきゃいけないらしいわ。ちなみに一口＝百万らしいの。でも住み心地はお墨付きらしいわ。あくまで尊だけど。ここに入るにはIQ一八〇以上でなければ解けないと言われる超特待生試験入試を受験するが、親に家賃と寄付金を払つてもらうかのどちらかよ。超特待生になつた場合は奨学金は無いけれどその分家賃と寄付金がなくなるらしいわ。白金の生徒は色々事情があつたりして、特別らしいけれど私達が知つてることは少ないわ。せいぜい学校案内に載つてること位よ。ただ一つ知つてる白金の生徒の特権、それは授業に出なくても授業中、寮内に居れば単位がもらえるの。だから副会長はここにいないのよ。OK？」

「わかりました。皆さんには『翡翠の館』に住んでいるんですか？」

「そうよ。あと、あなたには生徒会書記になつてもらうわ。それからあなたは『白金の館』に入寮することになつてゐるから

真里、爆弾投下。

「えつ！ そうなの！！」

あまりのことに固まっていた他の三人の中で一番最初に復活し、驚いたのは和子だ。てっきり自分たちと同じ『翡翠の館』に入寮するものだと思いこんでたらしい。

「えー 残念… せつかく楽しみが増えると思ったのに…」
これは穂波。どうやら優奈と過度なスキンシップをとるつもりだつたらしい。

「あのー… どうして私がいきなり生徒会書記なんですか？ しかも『白金の館』に入寮なんて… 一体全体どういふことですか？ 何かの間違いじゃ… うち、そんなに裕福じゃないですよ」

「あなたのお祖父様が理事長だからよ」

優奈の疑問を全て、彼女の祖父が理事長だからといふ理由一つで片付ける真里であつた。

説明が面倒くさいのだ。どんなに理由を問い合わせようとしてもはぐらかす真里に対し、こんな理不尽なことはないと思つ優奈であつたが、己の自業自得でもあるため何も言えないのであつた。

「さてと… 私は優奈さんを『白金の館』まで案内して、そのまま帰るからあなた達も今日はもう帰つていいわ。きちんと戸締まりお願いね」

「ラジャー！」

二人が言った。

「じゃあ、行きましょうか。優奈さん」

「はい、真里さん」

優奈と真里は生徒会室を後にした。

「あなたのことは理事長からよく聞いてるわ。もちろん、ここに来た理由も。困つたことがあつたら、遠慮なく言つてね。理事長の好意で同じ組だし」

「はい、ありがとうございます」

「敬語じゃなくていいわよ。同じ年だし」

「うん」

「ああ、着いたわ。ここが『白金の館』よ。私が案内出来るのは此処まで。後は中で奈緒子に聞いてくれ」

「えつ、どうして？」

「『白金の館』には『翡翠の館』の生徒は入ることが出来ないのよ。その逆も然り。安全上の問題を考慮して必要以上の人間を入れないのよ」

「なるほど。学院も色々考えているんだ？」

「そうね。それではごきげんよう、優奈さん」

「あつ、はい。やめなさい」

「挨拶は『じきげんよう』よ。これも伝統

「わかった。『じきげんよう、真里さん』

「それでよしー」

真里を見送った後、優奈は『白金の館』に入つて行つた。

第四章「白金（プラチナ）の館

第四章「白金の館」

あれ？ここはどこのお屋敷ですか？いや、まあ館だからお屋敷には変わりないのかもしませんけど流石に学校の寮とは思えませんよー。ちょっと現実逃避したくなるような光景を見て、優奈は目眩がした。

なぜなら優奈の目が狂つてなければ、寮の扉の脇にズラリと並ぶ人々、女性はメイド服を着ていて、男性は執事のような格好をしている。察することに使用人らしき人々がいるのだ。どう考へてもここは学校ではない。絶対に。びっくりしてぼうっと佇んでいると一人の女性が駆け寄つて来た。

「ごめんなさい。びっくりしたでしょ？」

「へつ？あつ……はい」

「私は生徒会副会長の吉田奈緒子さん付きのメイド、木山と申します。奈緒子ちゃんに頼まれてあなたをお迎えに上がりました。付いてきて下さい」

「はい。わざわざありがとうございます」

「いえ、仕事ですから」

優奈は木山の後に続いて、漸く赤絨毯の上を歩き出した。

「うふふ……でも本当にびっくりしたでしょ？私も初めてここに来た時はびっくりしたのよ。自分の母校にこんな別世界があつたんだなあつて」

「そうなんですか。あの、母校ってことはもしかして……」

「ええ、私も聖蘭出身よ。と言つてもここに通つたのは高校の三年間だけで生え抜きとは言えないけどね」

「そうですか。私と一緒にですね。どんな方ですか？奈緒子さんつて」

「奈緒子ちゃん？別に普通の子よ。同学年だし、あなたともすぐ

仲良くなれると思つわ

「そうですか」

「そうよ。まずはあなたの部屋に荷物だけ置きに行きましょ。

その後、奈緒子ちゃんの所へ案内するわ

「はい」

その後も木山の話に相槌を打ちつつ歩いていくと、すぐに部屋に着いた。

「あ、着きましたわ。ここがあなたの部屋よ」

かちや……

木山が部屋のドアを開けた。そこにはすぐく広いリビングが広がっていた。さらに中へ足を進めてみると寝室があつた。その奥には何もない部屋が一部屋。どの部屋も軽く十畳以上はあるだろう。一人で暮らすには少しもつたいないのではないか?

その疑問を木山にぶつけてみると

「そうかもしだせんけど卒業までに荷物は増えるでしょうし、奈緒子ちゃんはピアノとヴァイオリンをやりますからそれ専用の部屋を作つてますし。彼女の場合、吉田財閥の令嬢ですから、株の取引をP.Cで行う部屋も作つてますし。そういう風に用途で使い分ければ、そう広くもありませんわ。あつ、そうそう。このフロアの部屋、全て好きに使つてくれて構いませんから。これは生徒会役員の特権なんですよ。でも部屋と部屋を隔てる壁を壊すなんてリフォームはやめて下さいね。あなたが出て行つた後、直すのが大変ですから」

にっこりと微笑んでそう言つ木山に優奈はただ啞然として、

「はあ……」

と言つことしか出来なかつた。

「じゃあ、荷物も置いたことだし慌ただしくて悪いけど奈緒子ちゃんに会いに行きましょ?」

「そうですね」

二人はまたエレベーターに乗り、奈緒子の住んでいる最上階に行つた。

チン……とまるで高級ホテルのようなエレベーターの到着を知らせる音がして、ドアが開いた。

するとそこに一三、四歳だろうか？大人びた顔をした少女が立っていた。

「遅いぞ、木山！待ちくたびれるとこりだつたじやないか！」

奈緒子が言った。

奈緒子は栗色のロングヘアを持つ、高校生にしては少し幼く見えるが、大人びた綺麗な顔をした子だ。

「うふふっ！」「めんなさいね、奈緒子ちゃん。ちょっと優奈さんをお部屋まで案内していたもので」

「ふーん？まあ、いいや」

「あのう～」

優奈が不意に声を上げた。

「何です？」

「吉田奈緒子さんって高校生じゃないんですか？」

「高校生ですか？奈緒子ちゃんは五歳で初等教育を全てクリアして、七歳で中等部入学。その後は普通に三年間で卒業して、現在十一歳で高校一年生ですわ。所謂、飛び級ですよ。わかりました？」

「はい……」

「吉田奈緒子だ。よろしくな、のっぽ」

「よろしくお願いします。でも『のっぽ』じゃないです。田村優

奈つて名前があります」

「優奈か……良い名だな。敬語はやめろ。同学年なんだからな

「そうだね。何て呼べばいい？」

「奈緒子だ」

「じゃあ、奈緒子。改めてよろしくね

「ああ」

「あああ、挨拶も済んだことですし、もつお夕飯にしましょう。

優奈さんも食べて行って下さいね。優奈さんの歓迎会も兼ねている

のですから

今日はもう驚き過ぎてクタクタだつたが、木山にせつ言われてしまうとつい断れなくて、「はい」と頷いてしまつのだつた。

力チャ力チャと食事をする音だけが響く。

初めに沈黙を破つたのは優奈だつた。

「このパスタ、おいしいですね。木山さんって、お料理上手ですね。サラダもおいしかつたし」

「あら、ありがとうございます。でもサラダは山内さんがお作りになつたのよ。彼が作るドレッシングは超一級品なの」

「へへそなんですか。山内さん、サラダ本当においしかつたです」

「ありがとうございます、優奈様。木山さん、あまり誇張して誉めないで下さいよ。自分にはこのサラダドレッシングくらいしか執事として誉めていただけるものがないのですから。あまり誉められすぎると逆にプレッシャーになります」

山内が言つた。

「誇張なんてしてませんよ。本当のことですよ。それにそれしきのプレッシャーに負けてどうするんですか。そんなことでは吉田家の執事はやつていけませんよ?」

「そうですよ、私も本当のことを言つたまでです。それに様付けはやめてくださいね。私はあなたの主じやないんですし。あの……私が玄関に入つた時にずらーっと並んでたメイドさんと執事さん。あの人達も奈緒子の家の使用人さんですか?」

「いや、あれは違うぞ。あれは『白金の館』の生徒達のために学院側が雇つた使用人だ。主に寮の掃除と寮内にある店の管理を役割としている。優奈、いくら山内ちのサラダがおいしいからつて余り食べ過ぎない方がいいぞ。食後のデザートは私お手製のプリンだからな。山内、優奈のことはせめて『さん付け』にしてやれ、わかつたな」

「承知いたしました、奈緒子お嬢様」

山内が「ひ」り微笑んで言つた。

「眞さん、食べ終わつたようですね。じゃあそろそろアパートを出しましょうか」

「奈緒子お手製のプリンの登場だね。お手並み拝見！私、甘いものには「ひ」るせいからね！」

「きっとますぎて声が出なくなるぞ」

「ほんと～？」

そんな奈緒子と優奈の駆け引きを木山も山内も膳を下げながら、嬉しそうに見守つていた。奈緒子がこんなに上機嫌なのは木山でも滅多に見ないらしい。それだけ優奈がこの『白金の館』に住むことが嬉しいのだ。奈緒子のことを考えてくれたのか、それともただの孫馬鹿なのかわからないが優奈を『白金の館』に入れてくれたことを木山も山内も理事長に感謝していた。

「お待たせしました。お嬢様特製プリンで「ひ」ります」山内が言った。

「わあ～來た來た。さて、どうかな～？」

「うますぎて声が出なくなつても知らないからな～」

「それじゃあ、まず一口。いただきま～す！」

「どうぞ」

「う～ん？ おいし～！」

「すごいね～奈緒子！ おいしいよ～！ 今度、プリンの作り方教えてよ。私も作つてみたい」

「いいぞ。教えてやろ～つ。私も木山から教わつたんだがな」奈緒子は嬉しそうに笑つて言つた。

「「」駆走様でした。さて、私はそろそろお暇じよつかな」 優奈が言つた。

「もうか？ まだ八時半だぞ？」 奈緒子が言つた。

「う～ん。でも今日はやつぱりお暇するよ。荷物整理しなきゃだし

「そ～か…。人手がいるなら遠慮なく言えよ

「ありがとう。でも大丈夫」

優奈が奈緒子の部屋から自分の部屋へと帰ろうとするとき奈緒子は少し寂しそうな顔をした。出会った時は大人びた澄ました表情をしていた奈緒子だが、たった数時間のうちにすっかり奈緒子は優奈に懐いてしまった。こうしていると本当にただの十一歳の女の子なのだと優奈は思う。こんな風に懐かれてしまうと妹のように可愛く思えてしまった。

「じゃあ、明日学校でね」

優奈は言った。

「学校行くのか?」

奈緒子は不思議そうに聞いた。

「行くよ。なんで?」

そもそも当たり前のことに優奈は言った。

「どうして?『白金の館』の生徒は授業に出なくてもいいのを知らないのか?別に出なくたって支障はないよ。勉強、わからなかつたら私が教えてあげる。だからこの寮にずっといてよ!」

「何でそんなに寮に引き留めるのかわからぬけど取り敢えず行ってみるよ。行ってみなきゃどんな学校かわからぬしね」

「行かないほうがいいよ、絶対」

どこか不安そうな拗ねた顔をして奈緒子は言った。どうしてそんなに学校を嫌いするのか、優奈にはわからなかつた。明日、真里に聞いてみようと思いながら、自室に戻り、その後すぐ風呂に入り、荷物整理もせずに寝てしまった。

翌朝。

チュンチュン……チュンチュン……

かわいららしい小鳥の声にキラキラと眩しい朝日も手伝つて優奈に朝の訪れを知らせた。

「ん……もう朝か……」

時刻は午前六時半。朝食の用意を六時四十分に頼んである。急いで

制服に着替え、髪を整えた。ちょうど着替え終った時にコンコンとノックの音がした。

「誰？」

優奈は言った。昨日、この寮に来た時はあんなにお嬢様扱いされることに抵抗があつたのに今日はもうそれに慣れてしまつて。人間の適応能力とは凄いものだとつくづく感心しながら思わず苦笑が漏れた。

「佐伯です」

「入つて」

優奈の声を合図に力チャ……と静かにドアノブを回し、佐伯がドアを開けて入つてきた。

「優奈お嬢様、朝食をお持ちいたしました」佐伯が言った。佐伯は高校時代を木山と共に聖蘭で過ごした。つまり木山の同窓生というわけだ。クラスこそ一緒にならなかつたものの木山と佐伯は同じテニス部でダブルスを組んだ仲だという。今でも二人は親友同士だ。

木山曰く佐伯は「真面目の前に超がつくけどいい子」だそうだ。昨晩、優奈も話してみてわかつたが、木山の言うことはかなり的を射ていると思う。実際、佐伯は優奈の方から話しかけないと仕事中は話してくれない。たまに彼女の方から話しかけてきたと思つたら「明日の準備は大丈夫なのですか。」とか「明日の朝食は何時にお持ちしますよ。」など全て自分の仕事に関わることばかりだ。そのうち、仕事中毒になつてしまつのではないだろうか、と木山と二人で密かに心配しているのは二人だけの秘密だ。それほどまでに真面目な子なのだ佐伯は。

「優奈様、今日から学校ですね」

佐伯が言った。

「そうね。聖蘭つてどんな所？」

朝食を食べ終えた優奈がお茶をすすりながら言った。

「そうですね。良い所ですよ。いつでも和やかな雰囲気が流れてますし、母体が修道院なので教師にも男性はいませんから。いわ

ゆる、男嫌いの方でも安心できる学校ですわね。そのかわり、男性とのお付き合いの仕方が分からぬまま社会に出る羽目になりますけど。本当に『乙女の園』という言葉がぴったりの学校ですね」にっこりと上品な笑みを浮かべながら佐伯は話した。本当に聖蘭が大好きだという気持ちがひしひしとこぢらに伝わってくる。彼女の言つことはおそらく本当なのだろう。転校初日で内心少し緊張していた優奈だが楽しそうに聖蘭のことを話す佐伯を見ていると少し学校へ行くのが楽しみになってきた。

時刻午前八時。

「そろそろ学院に行つた方がいいですよ。十五分からお祈りの時間ですから」

「そうね。ありがと」

優奈はそう言つてカバンを持ち、部屋を出て行こうとした。

「優奈お嬢様！！」

佐伯が優奈を呼び止めた。「何？」優奈は言つた。

「職員室に寄つてから教室に行つてくださいね。昨日は黄金週間でしたから担任の先生にまだ会つてないでしょ？」

「そうだった！忘れてたわ！ありがと、佐伯さん」

「いいえ、仕事ですから。頑張ってくださいね」

少し心配そうな顔をして佐伯は言つた。

優奈は「どうしたんだろう？」と思つたが、きっと転校初日で緊張している自分を気遣つた言葉なのだろうと解釈し、ゆっくりと昨晩佐伯が教えてくれた通りに学院に向かった。

学院に到着した。すると正面玄関に一人の女生徒が立っていた。その女生徒は言った。

「『きげんよひ』。田村優奈さんですね。生活委員長の小宮由美子と申します。生徒会長の山田の言付でお迎えにあがりました」

「ありがとうございます。小宮さん。でも先に職員室に行かないで。昨日まで黄金週間でしたから担任の先生にまだお会いしてませんの」

「そうですか。クラスは？」

「百合組です。二年百合組」

「シスター・マーズですね。今の時間なら『薔薇の園』にいるでしょう。行つてみますか？」

「はい」

そうして一人は『薔薇の園』に向けて歩き出した。

「小宮さん」

「由美子です。聖蘭の伝統は『存じでしょ』つ？」

「はい。失礼しました、由美子さん。お聞きしてもよろしいですか」

「何ですか？」

「由美子さんは何組ですか？」

「百合組ですよ。あなたと同じ組です。生徒会のチップや白金、翡翠の上層部はたいてい百合組に集められます」

「じゃあ、奈緒子さんも」

そう聞いたら由美子は黙り込んでしまった。

「あの……由美子さん？」

「あ、はい。奈緒子さんでしたわね。そうですよ。彼女も百合組でしたわ」

「やつぱつ」

「ああ、着きましたわ。」こが『薔薇の園』です。まだ咲いてないんですけど満開になるとすぐ綺麗なんですよ」

「そうなんですか。見てみたいなあ～見頃はいつになりますか？」

「夏休み頃だったと思います。失礼します。シスター・マーズ、いらっしゃいますか？」

「いますよ。由美子さん。あら、そちらは転校生の……」

「田村優奈です。よろしくお願ひします」

優奈は頭を下げた。シスター・マーズと呼ばれた女性は美しい老婦人だった。優しそうだと思った。

「もうすぐ礼拝の時間です。講堂へ行きましたよ」

シスター・マーズが言った。

「そうですね。生徒会室に行くのはその後でも十分ですし」

由美子が言った。

「あらこの方は生徒会役員候補なの？」

「あ……？ 私も連れて来いと真里さんに言われただけなので。優奈さん、何かお心当たりは？」

「えっと……昨日、学校に来た時に生徒会書記になれと真里さんに言されましたけど……」

「ああ、なるほどね。じゃあ、シスター・マーズの予想通りとうことですね」

「ええ、そうですね」

シスター・マーズは穏やかに言った。

礼拝が終わり優奈は由美子と共に生徒会室へ向かった。

由美子は言った。

「一年百合組小宮由美子と田村優奈です。会長はこ在室ですか」

「入りなさい」

「失礼します」

「連れて来てくれてありがとう、由美子さん。あなたは教室に戻つてちょうだい。」

真里は言った。

「わかりました。失礼します」

由美子は真里にそう一声かけてから生徒会室を後にした。

「や、優奈さん。そこにかけて」

そう言って優奈に黒張りのソファにかけるように促した。

「あつ……はい。失礼します」

「さて……」

真里は言った。

「昨日、挨拶に来てもらつたから今日改めて言つことは何もないわ。ただ念には念をつてこと。貴方の性別がばれるとまざいつてことはわかつてゐるわよね?絶対に。頼んだわよ。私も理事長に頼まれたから渋々承諾したけれど本当はこんな危険な綱渡りしたくないんですからね」

かなり強い口調で念を押された優奈だが、それに不快感などはなかった。むしろ自分と一緒に危ない綱を渡つてくれていての真里に感謝の気持ちでいっぱいだった。

「ありがとうござります」

普段は照れ臭くて中々出ない感謝の言葉が今日は素直に出た。

「礼はいらないわ。理事長からふんだくるから」

本気とも冗談とも取れない言葉を真理は言つてのけた。そんな彼女のセリフに優奈は苦笑するしかなかつた。いやはや、この人の方が自分などよりよほど男らしいかも知れない。

「もうあなたは教室に戻りなさい、優奈さん。私は朝礼放送を行つてから戻るから。道順はわかるわよね?」

「はい。大丈夫です」

優奈は頷き、生徒会室を後にした。

優奈が生徒会室から十分に遠ざかつた後、真理はこの世の終わりのような大きなため息を吐いた。

真理は幼稚舎の時から聖蘭だ。日々『乙女の園』で皆と苦楽を共にしてきた。そこに突然、男が入ってきた。何をどうしたら良いの

かわからない。しかも知っているのは自分だけときた。全く本当にどうすればいいんだ。相談することもできない。八方ふさがりとまことにこのことだ。女ばかりの環境で過ごしてきた自分にはどう接すればいいのか、わからない。理事長には友人として接してくれればよいと言われているが、その声に応えられているかすら不明だ。真理はもう一度ため息を吐いて、仕事を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9017i/>

聖蘭女学院高等部

2011年2月27日09時35分発行